

知床

児玉 健次

(衆議院議員)



行ったとき、初めて自分の目でたしかめた。

次は羅臼岳だと楽しみにしていたが、一九六〇年の安保闘争を契機に平和委員会や原水協の活動を道東で開始したので、羅臼岳の登山は見はてぬ夢のまま今日に到っている。

登山の機会には恵まれていないが、職場の同僚と何回か知床には出かけた。ある年の夏、羅臼に旅行した。美しい海を見て、東京商船大学中退の私は同僚の制止をふりきって防波堤から海にとびこんだ。そのときには、オホーツクの海水の冷たさを肌身で知った。宇登呂の側の林道が延長された際にも車でかけつけ、地の漚ての温泉で夜おそくまで友人と酒をくみかわしたことが忘れられない。

一昨年七月の選挙で衆議院に送っていただいたからも、二度ばかり知床に出かけた。国有林伐採の問題を日本共産党国会議員団として現地調査するため、知床の自然を愛する多くの方々が大変お世話になった。

知床に出発する日が近づくと、「天気はどうだろう。知床の山々は見えるだろうか」と気もそぞろになってくる。国会というところは事大主義、権威主義がはびこる重苦しいところだし、最近の浜田幸一議員の暴言事件、「共産党を除く」各党委員への十万円の商品

券贈与などで、はしくも露呈されたように、百鬼夜行の場という一面もある。その場をしばし離れてなつかしい知床に行くのだから、遠足を前にした小学生のように気もそぞろになろうというものである。

昨年夏、二度目の現地調査には、八木健三会長に「択伐」強行の現場を案内していただいた。衆議院議員の岩佐恵美さん、参議院議員の近藤忠孝さん、それに私。三人とも体力には自信がある方だが、八木先生の健脚ぶりには一同ほとほと感心した次第である。

「択伐」の現場は、すさまじいものだった。平素はきわめて温厚な共産党の柴田重朗太さんが、累々と横たわる巨木を前にして、「これはホロコーストだ」と怒りの声をあげたが、これは調査に参加した者の共通した感想だったように思う。

私たちは国会に帰るとただちに林野庁に赴いて「択伐」の強行に抗議し、伐採計画の中止をきびしく申し入れた。

自然保護団体のみなさんの粘り強い活動が世論を喚起し、この原稿を書いている二月二十六日、各紙は「林業と自然保護に関する検討委員会」が、知床国有林での伐採は慎重に対応するよう意見をまとめたことを報道している。しかし、まだ安心はできない。さらにとりくみを強めなければならぬと思

う。

現地調査で各分野の専門家のご意見をきいたとき、シマフクロウ、オジロワシ、ヒグマなどの餌を確保するために、サケ、マスの河川上流への遡上を確保することが重要であると強調された。

調べてみると半島先端部の自然河川を除けば、どの河川も河口部でおこなわれる孵化事業で、母なる川に帰りついたサケ、マスは一〇〇％捕獲されてしまう。一部の河川にある折角の魚道も、魚道を維持する予算が不足しているために十分機能していない。

環境庁の給餌事業の一環として、サケ、マス孵化場から自然保護団体が捕獲されたサケ、マスを買い上げて、上流に細々と放流しているという。先日、ある会合で水産庁長官に会ったとき、私は孵化事業に支障がない範囲で、捕獲したサケ、マスを放流して欲しくないかと要請した。長官は検討してみたいと答えた。現在、これをつめている最中である。

魚道の維持と新設は、「河川管理者」に要請しなければならない。

自然保護団体のみなさんと力を合わせて、この分野のとりくみをすすめたこと私は考えている。北海道自然保護協会の一員でありながらさっぱり会の活動に参加できていないのが心苦しい

私は一九五九年六月に北見市の高校に赴任した。その年の夏休み、網走の友人に誘われ夫婦で斜里岳に登った。

山小屋に一泊し、朝早く出発して前夜来の激しい雨に打たれながら頂上に辿りついた。周囲の展望はゼロ、斜里岳がどんなところに存在するどんな山なのか、後日、天気の良い日に斜里に

が、みなさんのご指導、ご教示をいただいで国会で微力をつくしたいと願っている。

(札幌市在住)